

マーク・トウェインのアダム神話

——晩年の作品 “The Refuge of the Derelicts” を中心に——

渡 邊 眞 理 子

マーク・トウェインの作品の特徴を、ブレッシャー (Minnie Brashear) は、“No one... has used Bible stories as mythology to the extent that Mark Twain has.” と神話としての聖書への言及の多さを指摘する。⁽¹⁾ なかでもアダムへの言及が最も多く、⁽²⁾ 初期の *The Innocents Abroad* (1869) にすでに “A blood relation”⁽³⁾ としてアダムに対する親近感が表されており、死の2か月前に発表された “The Turning Point of My Life” (1910) でも、自分の作家としての人生へとつながる “first link”⁽⁴⁾ をアダムの失楽園に求めている。

晩年のトウェインは、“Extracts from Adam’s Diary” (1893) や “Eve’s Diary” (1905) などのアダムやイヴやサタンが語り手となった一連の日記形式の作品を執筆し、ますます深くアダム神話に没入する。“The Refuge of the Derelicts” (1972) は、1905年から1906年にかけて制作され、没後に出版された未完成の作品で、一章全体が猫についての長談義に費やされているなど散漫な印象をぬぐえない。しかしこの作品を、マロッティ (Maria O. Marotti) が、トウェインの “a reinterpretation of Adam’s fall”⁽⁵⁾ と論じるように、アダムの失楽園のイメージが全体に色濃く浸透しており、トウェインのアダム像が明確に示されている。“The Refuge of the Derelicts” を中心に、アダム像を通してトウェイン晩年の人間観を考えたい。

I

本来アダムは、神のかたちに造られた神の最高の被造物であり、エデンの住人であった。エデンは喜び楽しみを意味し、人間の楽園であった。善悪の知識

の木の実だけは食べてはいけないという神に命令に背き、アダムは禁断の実を食べる。この行為は、神の被造物である地位から神のようになろうとする人間の神への反逆であり、これが罪である。罪を犯したアダムとイヴはエデンを追放される。罪の結果は、神よりの疎外であり、死に象徴される人間の一切の不幸の原因は罪である。こうした伝統的な解釈では、アダムは神への反抗と不従順、罪と死との象徴である。

トウェインにとってアダムはどうであらうか。アダムは一つには、失樂園以前のエデンにおける人間の無垢の象徴である。*The Adventures of Tom Sawyer*(1876)のセント・ピーターズバーグは、“idealistic haze”⁽⁶⁾をおびて追憶されたエデンの園、ハニバルであり、トムは永遠に続く夏の中にいる“infant Adam”⁽⁷⁾として捉えられる。また、*Adventures of Huckleberry Finn* (1885)のハックは、“true ‘unfallen’ Adam”⁽⁸⁾であり、彼とジムとの牧歌的な筏での生活に、エデンにおける調和と愛の世界が示される。また、創世記に取材した“Extracts from Adam’s Diary” (1893)や“Eve’s Diary” (1905)では、フォークロアとして、アダムとイヴに無垢な男と女の純愛が描かれる。

しかし、トウェインが最も引かれるのは“the exile from Paradise”⁽⁹⁾としてのアダムである、とエンソー (Allison Ensor) は言う。トウェインには、すべての人間は“damned”な生物であり、追放されたアダムの子孫であるという見方が存在する。これは、伝統的なアダムの失樂園解釈を踏襲するものである。“Human beings *can* be awful cruel to one another.”⁽¹⁰⁾とリンチを目にしたハックの言葉に示される、人間は救いがたいほど残酷で、貪欲で、卑怯で、罪深い存在だとする認識である。ほとんどのトウェインの作品に、こうした人間観を見出すことができるが、特に晩年の作品、*What Is Man?* (1906)や“The Man That Corrupted Hadleyburg” (1899)などにはこの傾向が強く示され、「ペシミスティク」、「人間嫌い」の作家トウェインと言われるまでに痛烈な人間批判が展開される。

カプラン (Justin Kaplan) はトウェインを、“a double creature”⁽¹¹⁾と評し、その二面性を論じたが、人間を追放されたアダムの子孫だとする見方もまた二面的である。トウェインには人間を罪深い存在として捉える視点とともに、人

間を虐げられた犠牲者と捉えるもう一つの視点が存在する。この後者が “The Refuge of the Derelicts” の基調となっている。トウェインの作品に見られる既成の制度や権威に対する批判精神は、こうした視点の延長上にある。この作品には伝統的な失樂園解釈に異を唱える独自の解釈が大胆に展開されるが、そこには虐げられた者たちに対する共感と、彼らを食い物にする強大な力に対する強い怒りが示されている。彼は、人間の非人間的欠点を認めた上で、それを人間自身の罪だけに帰することはせず、人間をそうした状況に陥れる神の意図を問題にする。こうしたトウェインのアダム観は、神に対する懐疑と分ちがたく結びついている。

II

アダム神話は、“The Refuge of the Derelicts” では、ジョージ・スターリング (George Sterling) のアダムの記念碑建立計画として物語に導入される。彼が計画の賛同者を募るために訪れたストームフィールド提督 (Admiral Stormfield) は、社会からの落伍者 (the Derelicts) に同情し共に暮らしている。記念碑をめぐる落伍者たちの話し合いでアダムについて検討されるのだが、その中で提督の見解として、アダムに人間の原罪を求める伝統的な解釈とは異なる、トウェイン独自のアダム弁護の失樂園解釈が展開される。

トウェインはかつてアダムに記念碑を建てることを二度ほど一種の冗談として提案したことがあったが、そこに示されているアダム像というのは、人類の父祖としてのアダム、またソクラテスやシェークスピアやダーウィンといった人類の知的指導者の一人としてのアダムというものであった。これらには、人間の原罪と結びついた伝統的なアダムとは異なる尊敬の対象としてのアダム像が示され、アダムの名誉回復が意図されている。

“The Refuge of the Derelicts” では、アダムはそうした尊敬の対象からより身近な存在となり、神に創造されたばかりの子供として描き出される。提督はアダムが、“a man and a child at the same time” (208)¹³ と、経験の上では子供であったという観点から、善悪を知る木の実を食べることを禁じる、

“thou shalt not eat of it: for in the day that thou eatest thereof thou shalt surely die.”¹⁰ という聖書の神の言葉がこう再考される。

“How was he [Adam] going to know what ‘surely die’ meant? *Die!* He hadn’t ever struck that word before; he hadn’t ever seen a dead creature...there hadn’t ever been any talk about dead things, because there hadn’t ever *been* any dead things to talk about.” (209)

「死」が存在しないエデンの園のアダムにはその概念が理解できないのだから、「死」という罰は彼には無意味である。アダムとイヴは“two heedless children” (209) だった。無知で疑うことを知らない彼らが、経験をつんだ狡猾なへびに誘惑され禁断の実を食べたのを責めることはできないと提督は弁護する。キリスト教ではこの行為を、神のようになろうとする人間の神への反逆であるとする。しかし、「喜び、楽しみ」を意味するエデンに、すでに人間を神から疎外させ、死に追いやる可能性が用意されていたことは神学上でも問題とされる。トウェインもまた、エデンには存在しなかった死という罰をともなった命令を与える神の意図をまず問題にする。

この提督の解釈が落伍者たちの卑近な日常世界に当てはめられ、子供としてのアダム像が定着する。落伍者の一人アント・フィリス (Aunt Phyllis) が、“Po’ little Adam—po’ little Eve!” と母性的な同情心を示し、“It was de same like my little Henry.” (209) とアダムの行為を自分の息子の子供特有のいたずらと比べる。大人の言いつけを破るのはどんな子供にも備わっている特質なのだから、子が言いつけに背いたとしても、親は愛情からひどく罰することはできないとする。

無知な造られたばかりの大人子供としてのアダムと、彼に理解できない命令を与える親としての神は、トウェインが神と人間との関係を考える上での原点である。彼はこの観点から神の命令に背き禁断の実を食べるアダムとイヴの行為を、“Eve Speaks” (1923) や “Extract from Eve’s Autobiography” (1962) では当事者としてイヴの側から、また “That Day in Eden” (1923) や “Letters from the Earth” (1962) ではサタンの視点から繰り返し描いている。墮落し

た人類でさえ親は子に愛情をかける。神と人間とが親子のような愛の関係にあるエデンで、神が人間を罰するなどありえない。しかるに、アダムを罰した神はあまりにも無慈悲であり、神の罰は一方的な裏切り行為である。これが第二の問題点である。

さらに、トウェインはこの問題に別の角度から光を当てる。“Adam’s *temperament* was the first command the Deity ever issued to a human being. . . . And it was the only command Adam would *never* be able to disobey.”⁸⁹と、神がアダムに禁を破るような性質を与え、彼は自分の性質に従って行動しただけなのだ。トウェインは、被造物としての人間の限界を指摘して人間の無罪を主張する。そして、人間をこのように創造した神を糾弾する。このトウェインの失樂園解釈は、“[T]he only person responsible for the couple’s offense escaped; and not only escaped but became the executioner of the innocent.”⁹⁰という見解に帰結する。真に責めを受けるのは、アダムではなく神である。

“Life’s failures. Shipwrecks. Derelicts, old and battered and broken, that wander the ocean of life lonely and forlorn.”(186) と、沈没船のイメージで表される零落した落伍者たちの人生模様が、スターリングによってスケッチ風に語られる。落伍者たちの間でアダムについて話し合われることによって、彼らとアダムとの強い類似性が浮き彫りにされる。彼らの転落はアダムの失樂園の繰返しである。それぞれの幸福な生活が、彼らが犯したささいな過ちのため崩壊し悪夢に変わる。神に与えられた性質に従って行動しエデンを追放されたアダムと同じように、落伍者たちも、自己の性質から逃れることはできず破綻する。アダムの運命は、落伍者たちの人生の縮図となる。

アダムは伝統的には、神に反逆し禁断の実を食べ、神のようになろうとした人間の罪と墮落の象徴である。しかしここでは、アダムは子供として描かれ、彼が禁断の実を食べたのは、神に対する反逆ではなく、死という罰が理解できない無知な子供のささいな過ちであると主張される。一方神は、エデンに死を用意し、アダムに絶対的服従を求めながらも、彼に反逆を犯すような性格を与え、その性質に従って行動したからと言って彼をエデンから追放し、死の運命

に定める無慈悲な存在として認識される。このトウェイン独自の失樂園解釈は、犠牲者としての人間像と、加害者としての神の姿を浮かび上がらせる。

III

虐げられた者たちに対する深い同情の念と、人間愛が、スターリングが提督や落伍者たちを知り人生に開眼していく過程において示される。そこに、人間の愛に希望をつなぎ、疎外された人間の状況を克服する可能性を模索するトウェインの姿が読み取れる。

提督の家は、“Heaven of the Derelict,” “Refuge of the Broken Reed” (187) などと呼ばれる。これらの名は、“God is our refuge and strength, a very present help in trouble.”⁶⁷ や “A brused reed shall he not break...”⁶⁸ などの聖句に示される人間を哀れむ神が幻想であることを暗示する。そして、落伍者たちを哀れみ庇護する提督に示される人間の同胞愛が強調される。

提督は等身大の人間に対するように、天からの追放者たちにも同情を寄せる。彼はアダムの無罪を主張し、“Adam was like *us*, and so he seems near to us, and dear. He is kin, blood kin, and my heart goes out to him in affection.” (221) と親近感を明らかにする。また、人間を誘惑し神に離反させたとされるサタンも、提督にとっては、自分が所有していない全世界を与えようと言ってキリストを誘惑するほど知性がなく、無能な存在と映る。そしてサタンもまた、“Is he one of life’s failures... *One* of them? why, he’s *It*!” (195) と落伍者として提督の哀れみを受ける。

スターリングの人生開眼の導き手となるのが甲板長 (Bos’n) と呼ばれる提督の執事である。甲板長とスターリングは、*What Is Man?* (1906) における老人と若者の関係にあるが、その意図するところはまったく反対である。*What Is Man?* では、人間は生まれついた性質に支配される機械であり、その人間の性質や訓練がその運命を決定し、人間の自由意思は幻想であり、善行さえも自己保存の本能に基づくものである、という人間機械論が老人の主張として展開される。彼は若者が提出する愛に基づく行為の例をすべて論破し、母

性愛といった無私の極致とされている自己犠牲的愛情さえも自分自身の心の満足を得たいという支配的衝動の表れでしかないと述べる。*What Is Man?* は、二律背反的なトウェインの人間観の一方の典型であり、自己愛以外の愛は否定され、人間を利己的で愚昧な存在として捉える。

しかし、ブレアー (Walter Blair) が、トウェインの人間機械論について、“all his talk about believing ‘merely a machine automatically functioning,’ Mark had not been completely converted by his own eloquence”⁸⁹と指摘するように、トウェインは自分の人間論に完全に納得してはいない。彼は、“The Refuge of the Derelicts”において他者に対する愛を示す人々を取り上げ、人間は機械でしかないという自己の論理の反証を捜し求める。スターリングは甲板長の言葉をこう伝える。

The bos'n claims that there isn't an entirely bad person in the whole Membership... He says there is a good spot in each one; that in a lot of cases many people can't find it and don't, but that the Admiral can and does—every time; and Martha too. He says it isn't smartness, it's instinct, sympathy, fellow-feeling—which is to say, it is a gift, and has to be born in a person, can't be manufactured. (231)

What Is Man? とは逆に、ここでの老人、甲板長の役割は、人間の美德を指摘し、人間を肯定的に捉える姿勢を教えることである。

ここにも人間の“good spot”を見出すのは生得の才能によるのだという *What Is Man?* 同様の、人間は生まれつきの気質に支配されるとする決定論的見解が示される。しかし、“sympathy, fellow-feeling”といった *What Is Man?* では否定されている他者への生得の愛が強調される。この生得の愛はスミスに体现されている。新聞に載っている不幸な人々の話を読んで胸を傷めないではおれないスミスの性質を甲板長は次のように説明する。

“Smith, he can't help the way *he's* made. Land, he takes the whole suffering world into his heart... Why, Mr. Sterling, that man takes

into his inside enough of the human race's miseries in a day to last a real manly man thirty years!" (205)

他人の悲惨な人生まで自分の内に取り込み、苦悩せずにはいられないスミス。こうした人間に対する深い共感⁽⁸⁰⁾は、愛でさえ自分自身の“spiritual comfort”を得ようとする利己的な支配的衝動の一つの現れにしかすぎない、とする*What Is Man?*における老人の主張に対する反証である。

トウェインは人間同志の愛の可能性を模索する。スミスをはじめ、暴走する馬車から母子を救い出すという命懸けの無私な行いをするアンクル・ラースタス (Uncle 'Rastus)。火の中から他人の子を助け出すこともいとわない女候爵 (marchesa)。落伍者たちに深く同情し、彼らを住まわせ食べさせている提督。どんな人にも“good spot”があると信じる甲板長。次第に、スターリングは彼らと同じ視線で落伍者を眺めるようになり、それまでと違った人間観を得る。それが彼の自己発見につながる。

I have found the human race. It was all around me before, but vague and spectral; I have found it now, with the blood in it, and the bones; and getting acquainted with it...I am also getting acquainted with myself. (206)

社会的な虚飾をはぎ取られた落伍者に等身大の人間の現実を見出すスターリングの視線に、すべての人間は落伍者であるというトウェインの人間認識が示される。

疎外された人間の状況を克服する可能性を人間の愛に求めようとすればするほど、トウェインは無目的で強力な力の存在をますます強く感じざるを得ない。ラースタスの逸話はトウェインの身近に起きた出来事を潤色したもので、人間の無私な愛の証明として彼の心に長く温められたものである。1877年の夏に彼がクォリー・ファームに滞在中、農場で働いていた黒人のジョン・ルイス (John Timson Lewis) が、義弟のチャールズ (Charles Langdon) の妻と娘を乗せた馬車の暴走を身を挺して止め、彼らの命を救った。トウェインはハウ

エルズ (William Dean Howells) に感動さめやらない手紙を書き送っている。この逸話は “special providence” をめぐる ラースタスとフィリスの論争で終わる。

“You is de man dat’s allays sayin’ de’ ain’t no sich thing as special providence. . . . Who put you in dat road, right exackly in de right spot, right exackly at de right half-second?—you answer me dat, if you kin!”

“Who de nation sent de *hoss* down dah in sich a blame’ fool fashion?” (238)

ラースタスの言葉には、人間の幸不幸や生死など意に介さないこの宇宙を支配する強大な力としての神の姿が示される。人間の愛に可能性を求めようとすれば、トゥェインの思念は人間を破滅に陥れる無目的で強力な神に収斂してゆく。この神の前には人間は微細な存在でしかない。

What Is Man? の人間機械論でも、同様に、人間を機械として造った神に最終責任が求められている。

“Who devised the man’s mind, whose machinery works automatially, interests itself in what please, regardless of his will or desire, labors all night when it likes, deaf to his appeals for mercy? God devised all these things. *I* have not made man a machine, God made him a machine.”

人間は神の法則に従う機械にすぎず、人間の利己性や貪欲さは彼自身の罪ではない。

一見矛盾しているようだが、救いがたいほど残酷で罪深い存在としてのトゥェインの人間批判も、この作品に表される人間に対する深い同情心も、人間の疎外された状況に対するトゥェインの強い関心を示すものである。人間についての彼の思念は不可避的にこの宇宙を支配する神に至る。

IV

“The Refuge of the Derelicts”の最終章で、トウェインが考える神の本質が明らかにされる。作品はプラム・ダフ (Plum Duff) と呼ばれるお楽しみの夕べの描写で終わっている。呼びものは映画 (living pictures) つきの “The Benevolence of Nature” と題する講演である。講演者はパーソンズ (Parsons) 牧師で、彼はありきたりのことにも “Lo, what God hath wrought!” (215) と神を讃え大仰に驚くので、「見よ神の御業牧師」(Lo-what-God-hath-Wrought) とあだ名されている。

事前に十分な調整ができていなかったため、講演者の意図とは異なる映像がスクリーンに映し出される。それは講演者のセンチメンタルな自然賛美をくつがえすような弱肉強食の自然界の厳しい掟に支配される小動物の姿である。講演者の話からは、母なる自然が子グモたちに食物を与えてくれると信じる幸福感に満ちた母グモの姿が浮かび上がる。しかし、実際に映写されたのは自分の子に貪り食われている母グモの断末魔の姿である。さらにこの母グモはジガバチに卵を産みつけられ、生きたまま幼虫の餌となる。内蔵を食い進むジガバチの幼虫と、弱々しく足を動かす母グモの姿が映し出される。

他者の死の犠牲の上に生が成り立つ自然界の現実が、動きを伴うリアルな映像として映し出された時、講演者の母なる大自然の慈悲深さという概念は、その欺瞞性を否応なく暴かれる。講演者はこの映像化された冷酷な現実と、自己の信じるセンチメンタルな自然観とを必死に調和させようとするが、映像と解説との間があまりにも大きなギャップが存在するため、彼の言葉はブラックユーモアの効果さえもたらず。主題は自然の慈悲深さ、つまり愛の神である。彼が美辞麗句を連ねて愛の神を力説するが、映像化された雄弁な現実の前に彼の言葉は空虚に響き、愛の神が幻想にすぎないことが暗示される。

“The Goodness of Providence,” “the Creator’s love” といった初めの原稿で神と書かれていた箇所が消され、その代わりにそれぞれ “The Benevolence of Nature” (244), “our dear old Mother Nature’s love” (245) というよう

に、すべて大自然という表現に変えられている。²⁰³ キリスト教に基づく伝統的な神の姿が、ダーウィニズムの影響により崩壊するなか、トウェインもまたこの影響下にあった。彼の神に対する観念は、ダーウィンの自然淘汰説的世界観と結びつく。この作品において自然の弱肉強食の世界は神の無目的で強大な力の現出として描かれる。弱い生物を食いものに強い生物が生き残り進化する。そうだろうか？ “Lo, what God hath wrought!” と、指し示される神の御業の支配する世界は、だれもが犠牲者となり得る勝者のない連鎖的殺戮の世界である。人間も他の動物同様、この弱肉強食の掟に支配されている。

トウェインはこの作品の執筆とほぼ同時期の1906年6月に行われた一連の口述で同様の動物界の弱肉強食の例を挙げ、彼が考える「実際の神」(“the real God”)の本質を語っている。プラム・ダフの夕べに示される世界は、この一連の口述の基調と同様だと考えられる。彼は聖書の神と実際の神とを区別して考える。実際の神は、全宇宙とそこに住むあらゆる生物の創造主であるが、人間という生き物にまったく関心のない超越した存在で、人間の祈りなどには耳を傾けることなどない。人間を含めあらゆる生物の誕生から死に至るまでを知っている神は、“He made it an unchanging law that that creatuer should suffer wanton and unnecessary pains and miseries every day of its life.”²⁰⁴ と、生物が無用な苦痛にさいなまれ生きることを定める。彼らの生は神によって巧妙に計画され隠されている、“traps, pitfalls and gins”に取り囲まれているのである。罠にかかった生き物はどうか。

In flying into the web the fly is merely guilty of an indiscretion—not a breach of any law—yet the fly’s punishment is ten-thousandfold out of proportion to that little indiscretion.²⁰⁵

トウェインの視点は弱者の側にある。ハエの罪はただ軽率であっただけである。しかるにハエが受けるのは死という究極の罰なのである。ささいな過ちゆえにエデンを追放され死という咎を受けた “heedless” なアダムのように。

人間の生はこのアダムの失楽園の繰り返しである。縦横に張りめぐらされた罠に不可避免的に陥いり “Life is a swindle.” (201) とつぶやく人間たち。落伍

者たちの人生は、すべての人間の疎外された生の状況を象徴する。その姿はこう描写されている。

Lord, those pathetic figures! Here, and there and yonder they hung limp upon their chairs, lost to the present, busy with the past, the unreturning past—there, brooding, they hung, the defeated, the derelicts! They all had a droop; each a droop of his own, each telling its own story, without need of speech. How eloquent is an attitude—how much it can say! When a silence falls, we who are alive start out of our thoughts and look about us, but it descends upon these dead-in-hope like the benediction of night, and conveys them gently out of this workaday world and consciousness of it. (217—18)

この落伍者たちの群像こそ、ほかならぬアダムの記念碑である。エデンを追われた“the damned human race”の姿である。

宇宙を支配する神が定めた法則の冷酷さを前に人間にできることは、“stand astonished at the all-comprehensive malice”⁹⁸と、あまりの悪意にただ茫然自失するのみである。トウェインの神に対する観念は、ダーウィンの自然淘汰説的世界観と結びつき、無慈悲で、超越した存在として示され、アダムに象徴される人間は、そうした神の犠牲者として捉えられる。ここには、人間を外的な自然の力によって支配される卑小な存在と捉えるナチュラリズムの反映を読み取ることができる。

しかし、こうした自然淘汰説的世界観はあくまで人間を取り巻く世界の無目的さや無慈悲さを表現する一手段であって、トウェインは決して人間が置かれた絶望的状况を受け入れ、人間の無力さを嘆いているのではない。反対に、人間をそうした状況に陥れる強大な力である神の不条理さに怒りをつのらせる。そして、疎外された人間の状況を克服するものとして、“the human race’s miseries”への深い同情心としてスミスに体现されている人間の愛に希望をつないでいるのである。

晩年のトウェインは人間を醜い欲望をえぐり出し、痛烈な皮肉を浴びせかけ

る作品を描き、陰鬱なペシムズムに傾いていった。しかし、人間に対する失望感とはときに彼を圧倒することはあっても、人間に対する希望を捨て去ってはいない。“To the Person Sitting in Darkness” (1901) や、*King Leopold's Soliloqui* (1905) といった作品に示される、虐げられている者たちに深い同情を寄せ、西洋帝国主義政策に対して非難の矢を放つトゥェインの姿勢も忘れてはならない。この“The Refuge of the Derelicts” は未完の作品であるが、アダムに象徴される人間存在全体を落伍者として捉え、その絶望的状况を克服するものとして人間の愛に希望を託す晩年のトゥェインの一面をうかがい知ることができる作品と言えよう。

註

- (1) Minnie M. Brashear, *Mark Twain: Son of Missouri* (1934; Univ. of North Carolina Press; New York: Russell & Russell, 1964) 208.
- (2) Allison Ensor は正確ではないと断って、Twain の作品中でアダムへの言及は76回であると述べているが、Stanley Brodwin は未発表の作品にはもっと多くの言及があるとしている。Allison Ensor, *Mark Twain & the Bible* (Lexington: Univ. of Kentucky Press, 1969) 110 n5. および Stanley Brodwin, “The Humor of the Absurd: Mark Twain's Adamic Diaries”, *Criticism* 14 (1972): 51 n6. 参照。
- (3) Mark Twain, *The Writings of Mark Twain*, ed. Albert B. Paine, vol. 2 (1922—25; New York; Tokyo: Honnotomoshya, 1988) 307.
- (4) Mark Twain, “The Turning Point of My Life,” *What is Man? and Other Philosophical Writings*, ed. Paul Baender (Berkeley: Univ. of California Press, 1973) 417.
- (5) Maria Ornella Marotti, *The Duplicating Imagination: Twain and the Twain Papers* (University Park: Pennsylvania State Univ. Press, 1990) 136.
- (6) Dixon Wecter, *Sam Clemens of Hannibal* (Boston: Houghton Mifflin, 1952) 220.
- (7) Albert E. Stone, Jr., *The Innocent Eye* (New Haven: Yale Univ. Prss, 1961) 76.
- (8) Stanley Brodwin, “Mark Twain in the Pulpit,” *One Hundred Years of “Huckleberry Finn”* eds. Robert Sattelmeyer and J. Donald Crowley (Columbia: Univ. of Missouri Press, 1985) 378.
- (9) Ensor 31.
- (10) Mark Twain, *Adventures of Huckleberry Finn* (Berkeley: Univ. of Cali-

fornia Press, 1988) 290.

- (11) Justin Kaplan, *Mr. Clemens and Mark Twain* (New York: Simon and Schuster, 1966) 18.
- (12) Mark Twain, "Adam Monument Proposal—Documents," Appendix B of *Mark Twain's Fables of Man* 449—52. Mark Twain, "A Monument to Adam," *The Complete Essays of Mark Twain*, ed. Charles Neider (Garden City: Doubleday & Co., 1963) 333—34.
 1879年に Thomas K. Beecher らと語らって、New York の Elmira だけが独占的にアダムの記念碑を建てることを認めようと議会で嘆願書 ("Petition to the Honorable Senate and House") を出す用意をしていた。この嘆願書に名を連ねていた、General J. Hawley 議員が、議会で提出する役を仰せつかったが、これが及ぼす影響を恐れて提出しなかった。1900年代の初期に、アダムが神話であると考えている二人の牧師志願者を長老派が受入れなかったというニュースを読んで、再び、"Proposal for Renewal of the Adam Monument Petition" を作成している。
- (13) Mark Twain, "The Refuge of the Derelicts," *Mark Twain's Fables of Man*, ed. with introduction by John S. Tuckey (Berkeley: Univ. of California Press, 1972) をテキストとして用いた。本文中の引用は同書からとし、かっこ内にページ数を記す。
- (14) The Holy Bible (Authorized King James Version, Chicago: Spencer Press, 1947), Genesis, ii, 17.
- (15) "The Turning Point of My Life" 464.
- (16) Mark Twain, "Lettrs from the Earth," *What is Man? and Other Philosophical Writings* 417.
- (17) The Psalms, xlii, 1.
- (18) Isaiah, xlii, 3.
- (19) Walter Blair, *Mark Twain and Huck Finn* (Berkeley: Univ. of California Press, 1960) 343.
- (20) Mark Twain, *What is Man?, and Other Philosophical Writings* 138.
- (21) *Mark Twain-Howells Letters; The Correspondence of Samuel L. Clemens and William D. Howells 1872—1910*, ed. Henry Nash Smith, William M. Gibson and Frederick Anderson, vol. 1 (Cambridge: Harvard Univ. Press, 1960) 194—99, 202. Mark Twain はこの逸話を、*Pudd'nhead Wilson* (1894) の草稿の中で使ったが後に削除している。
- (22) *What is Man?* 210.
- (23) "The Refuge of the Derelicts," *Mark Twain's Fables of Man*, Textual Apparatus 556—615.
- (24) Mark Twain, "Reflections on Religion" ed. Charles Neider, *Hudson Review*

16 (1963): 346.

~~(25)~~ "Reflections on Religion" 347.

~~(26)~~ "Reflections on Religion" 347.